滝瀬遺跡始め4遺跡（範囲確認調査）
大名倉遺跡/西地・東地遺跡/万瀬遺跡/滝瀬遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町大名倉字滝ノ上ほか、同西地・東地、同町川向字マンゼ、同町八橋字タキセ
（北緯35度6分33秒 東経137度32分44秒、北緯35度6分40秒 東経137度32分40秒、
北緯35度6分49秒 東経137度33分58秒、北緯35度7分10秒 東経137度34分55秒）

調査理由　設楽ダム工事

調査期間　平成25年5月～25年6月

調査面積　400㎡

担　当　者　宮腰健司・永井邦仁

調査の経過　調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。今年度は4遺跡が範囲確認調査対象となった。調査方法は、各遺跡内の事業用地内にかかる部分について、1m×2mから最大で3m×５m四方のテスト・トレンチ（T.T.）を設定して基盤層まで掘削し、遺構・遺物の有無を確認するとともに、堆積層の状況を観察するものである。トレンチ数は、大名倉遺跡で18か所（39㎡）、西地・東地遺跡で28か所（70㎡）、万瀬遺跡で30か所（64㎡）、滝瀬遺跡で34か所（227㎡）の、総計110か所（400㎡）である。

立地と環境　大名倉遺跡と西地・東地遺跡は豊川上流のそれぞれ右岸と左岸に位置する。大名倉遺跡（標高419～458m）は、河岸段丘から斜面にかけて立地し、概ね前者が耕作地で後者が現在の集落となっている。西地・東地遺跡が立地する斜面は大半が扇状地となっており、標高450～465mである。万瀬遺跡は豊川支流境川の右岸河岸段丘から斜面に立地し、現在集落は国道256号と設楽大橋北で交差する県道427号（標高419m）の周囲に展開する。滝瀬遺跡は、万瀬遺跡からさらに上流の境川右岸河岸段丘（標高420～422m）から斜面（標高433～438m）に立地するが、河岸段丘の一部が近年に盛土造成されておりその微地形や範囲についてはわからなくなっている。

調査の概要
大名倉遺跡　大名倉遺跡の南北に細長い調査対象地は比較的高位にあり、中央部の民家を挟んで北区域(T.T.-1～9）と南区域（T.T.10～18）に分かれる。北区域北端では土石流堆積が確認され遺構・遺物ともに希薄である。一方南区域ではT.T.11・12で土石流堆積がみられ、付近の方によると近代にも土石流が発生しているという。それ以外ではシルト質の地山が検出され、上位の平場（T.T.17・18）では土坑が検出され近世の陶磁器が出土する。近隣の墓地にある墓石には18世紀後半以降の年号が記されており、その頃から屋敷地化が始まったようである。縄文時代の遺物が多数出土する河岸段丘面とは対照的といえよう。

西地・東地遺跡　西地・東地遺跡では、県道33号西側（T.T.1～3）は崖地形となり、T.T.4～10にかけての尾根状の地形では遺物を包含する黒色土の水平堆積を認められる。当該層はさらに細分されるとみられるが、縄文時代の石鏃（T.T.-6）や宋銭（T.T.-9）が出土し注目される。またT.T.-9からは古瀬戸の平碗なども出土し、付近の昨年度範囲確認調査トレンチで灰釉陶器から山茶碗の出土があることから、縄文時代とともに平安時代から江戸時代の遺構・遺物の分布が想定される。しかしその東方では土石流に由来する厚い傾斜堆積が2m以上に及ぶトレンチがいくつもある。これらは若干の遺物があるものの遺構が検出されていない。わすかに町道脇に平場があって、T.T.-12・13・21で粘土質の安定的な地山が認められるが、ピットと近世の遺物が出土しているのみである。

万瀬遺跡　万瀬遺跡では、下位の杉林中のT.T.-1～4は粘土質地山面に遺構はなく、近世後半以降の遺物が若干出土するのみである。一方県道33号直下の平場（T.T.-8・9）の粘土質地山面では、土坑などが検出され縄文土器（無文）が出土した。当該トレンチ北東側では平成21年度の調査で谷地形になることが想定されるので、これに沿う立地の縄文時代集落が想定できよう。そして県道から上位の斜面地は大きく崩れた形跡がなく、その南東下位の平場（T.T.-16～18・24）では遺構の他に近世陶磁器が出土している。地元の方によると、当該平場には「舞台屋敷」と呼ばれる大きな建物があったと言い伝えられており、約100年以上前には失われていたらしい。さらに東方のトレンチでは戦国時代の遺物も出土しているので、現集落に続く戦国・江戸時代の遺構・遺物分布が想定される。加えてT.T.-28・29では縄文土器が出土しており、ここも小規模な縄文時代の居住地になっていたと考えられる。

滝瀬遺跡　滝瀬遺跡は、上位斜面のT.T.1～11で安定的な粘土質地山がみられるので比較的古い地形が保持されているものと考えられる。特にT.T.-6では黒色土を埋土とする幅約1mの溝状遺構を検出し、石器剥片や土器砕片が出土した。広がりは確かめられていないが、一帯に縄文時代の遺構が展開する可能性が考えられる。これに対して下位の調査対象地では、盛土下の河岸段丘面を検証した。T.T.-12～14では氾濫原の堆積であるがT.T.-15・16で砂礫層地山の上に黒色土が認められ縄文土器や石器剥片が多数出土した。平成24年度調査対象地に隣接するT.T.-17～21は、地山面で遺構を検出し縄文土器・石器が出土したことや、T.T.-18と同22の間で地山面の高低差が1.7mもあることから、当該地点に段丘崖があり縄文時代集落の端部になるとみられる。段丘崖線は概ね直線で下流方向にのびるが、T.T.-30・31に谷地形があり、その北側T.T.-32～34で溝状遺構や縄文土器が検出されている。またT.T.-32からは平安時代の灰釉陶器も出土している。

（永井邦仁）

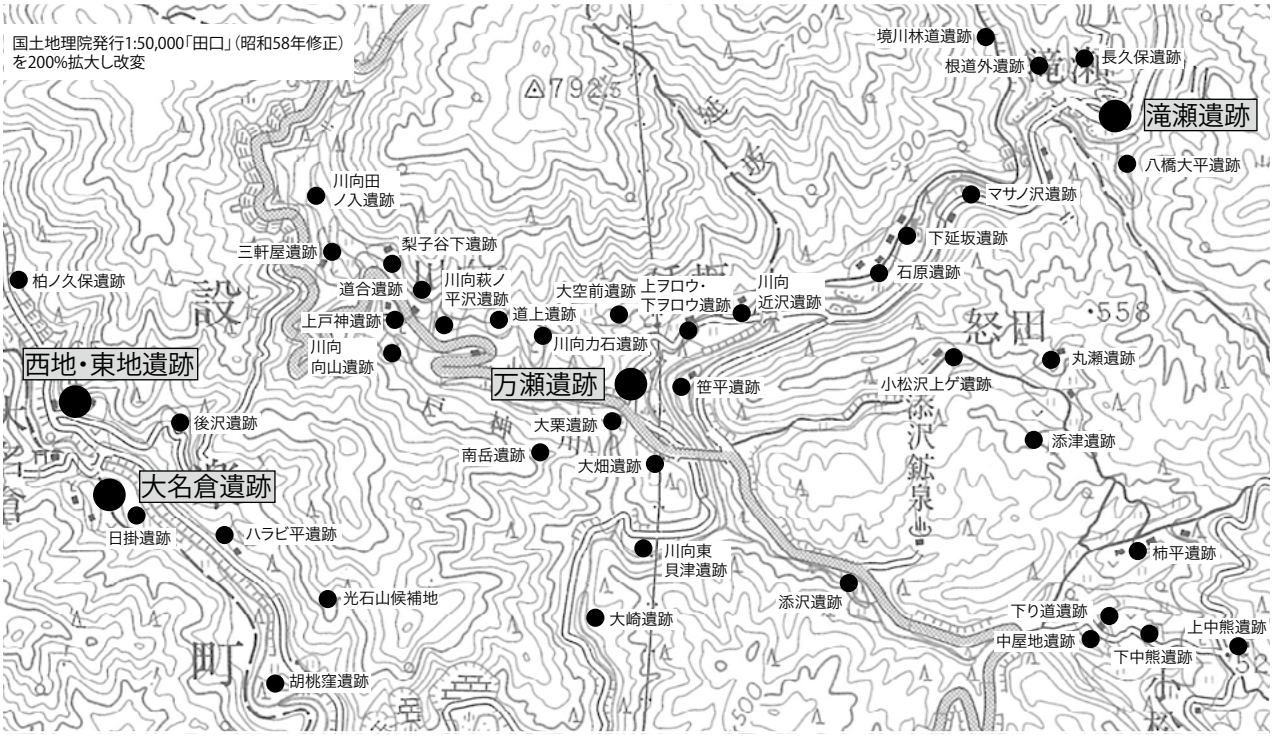
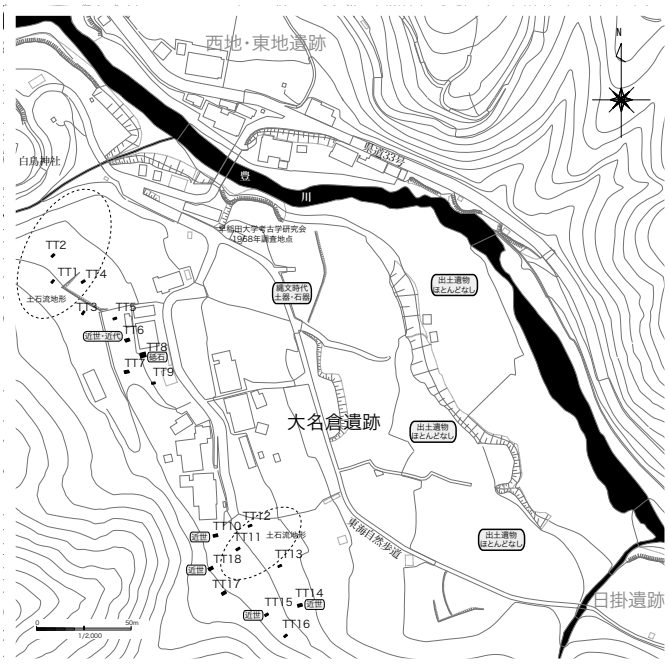
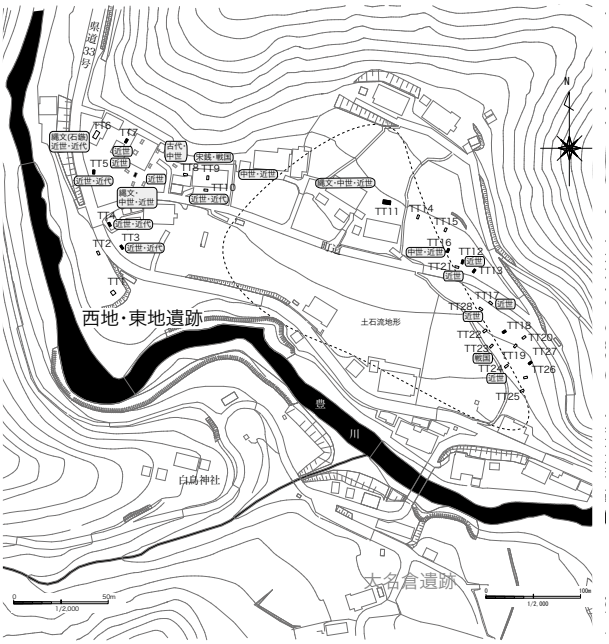


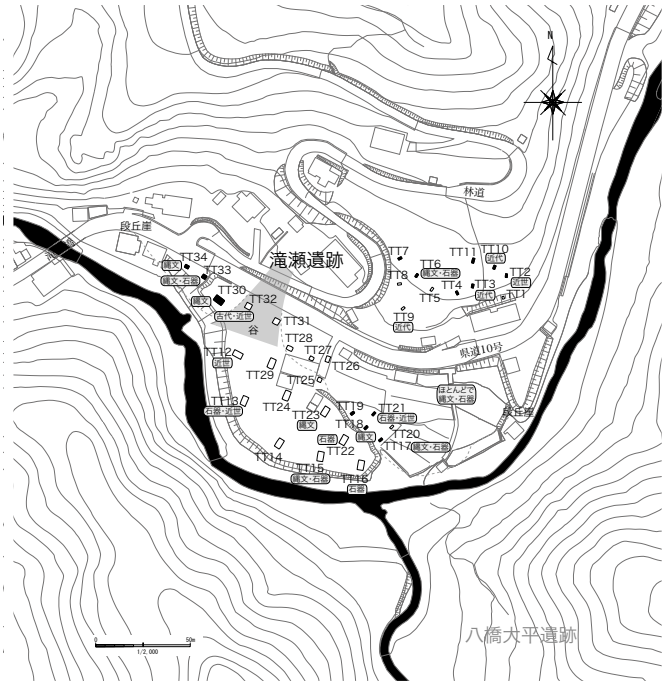
図１　遺跡の位置（1:25,000）



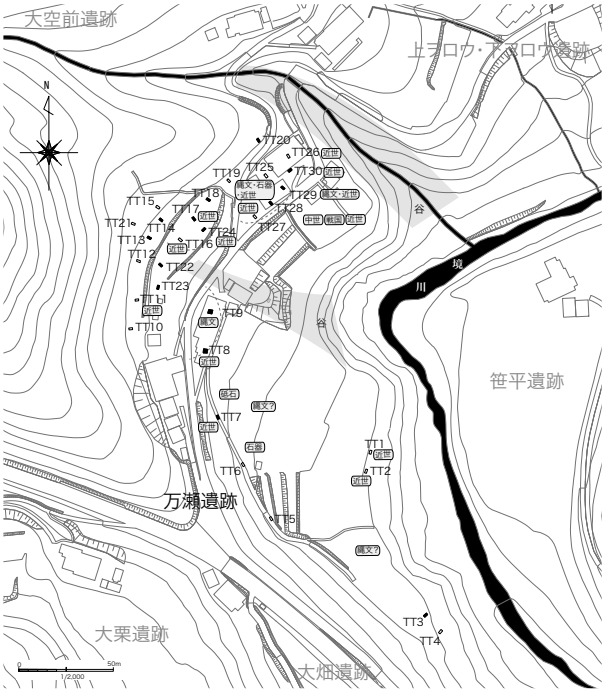
大名倉遺跡　過去の発掘調査および当センターがこれまで実施してきた範囲確認調査は、河岸段丘面を中心とする比較的低位が対象地であったが、本年度はより高位で斜面にかかる地点が対象地となった。出土遺物は前者では縄文時代の土器・石器がほとんどであったのに対し、本年度は縄文土器・石器は全くなく、近世後半を中心とする遺物の出土にとどまった。



西地・東地遺跡　遺跡の西端および東端を中心に確認調査を実施した。特に遺跡西端では石鏃や宋銭といった特徴的な遺物が出土している。一方で東端では遺物の出土が少なく、安定的な遺物包含層はあまり存在していない。特に下位になると土石流などの斜面崩落による堆積が厚い。



滝瀬遺跡　河岸段丘の崖線が途中に小谷を挟みながら直線的にのびる。この崖上に縄文時代集落が展開するとみられるが、崖下の氾濫原からも縄文土器や石器が多数出土しており注意を要する。一方、県道より上位の斜面には比較的緩いところがあり、ここにも縄文時代の遺構・遺物の分布が想定される。



万瀬遺跡　対岸段丘面の笹平遺跡は縄文時代集落とみられるが、T.T.-1～4は数m高くなり遺構・遺物がほとんどない。これに対して上位の平場に縄文土器がみられる。出土トレンチはいずれも沢地形に面しており関連があるとみられる。

図２　範囲確認調査の概要